

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

日本宗教史像の再構築

Reconstructing Japanese Religious Histories

2. 研究代表者氏名

大谷栄一

OTANI Eiichi

3. 研究期間

2014年4月 - 2017年3月

4. 研究目的

近年、日本宗教史の研究は新たなステージを迎えている。近代仏教史を例に挙げれば、従来の研究が更新されつつある。長年、この分野を牽引してきた吉田久一、柏原祐泉、池田英俊らの研究に多大な実証的成果を認める一方、宗教史的事実の位置付けに一定の「偏向」があることも徐々に明らかとなってきた。たとえば、神智学協会会長・オルコットの来日(明治22年)という出来事の宗教史的意義が検討されることはまれだった。しかし実際には、来日したオルコットは各地で大歓迎され、一種の仏教リバイバルを引き起こした。ここに、「神智学」のオカルティズムに対する近代仏教研究側の予見があったことは認めざるを得ない。すなわち、近代主義的な「宗教」観に基づく事例の取捨選択が強固に作用していたのである。こうした既存の宗教史研究の「近代主義的」なバイアスを解きほぐし、それによって不可視化されていた事象に光を当て、新たな日本宗教史像を構築していくことが本研究の目的である。

6. 研究成果の概要

従来の日本宗教史研究にみられる「近代主義的」バイアスを可視化し、その克服を目指す共同研究「日本宗教史像の再構築」は、研究史の再検討と実証的アプローチを2本柱として、従来の日本宗教史像—近代に成立した「宗教」概念や「宗教」理解を不用意に過去に投影する宗教研究—の更新を試みた。前者に関しては、黒田俊雄の権門体制論、安丸良夫の民衆宗教研究、肥後和男の宮座研究、高取正男の宗教民俗学、等々についてワークショップを開催し、その到達点の問題点の確認がなされた。後者に関しては、大教団から民間信仰に至るさまざまなレベルでのトランスナショナルな宗教実践、宗教と複製技術、メディアの関係性、宗教結社と出版事業や図書館事業の相関、ヨガ等の身体技法を媒介とした国際的な実践の宗教化／脱宗教化／再宗教化の諸相、といった多様なテーマが議論され、個々の具体的事例か

ら日本宗教史像の修正・更新が提案された。以上の成果に基づき、報告書をまとめる予定である。

8. 共同研究会に関連した公表実績

「特集：日本宗教史像の再構築－トランスナショナルヒストリーを中心として－」『人文学報』108 (2015.12) 2015年12月12-13日 International Workshop “Modernization, and Spiritual, Mental and Physical Practices: From Yoga to Reiki”

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究活動の概要については逐次ホームページで公表するほか、関連学会でも時宜に応じて報告する。最終報告書としては日本宗教史研究における重要概念の解説集を刊行する予定である。